

ロンドンに残された松方コレクション

パンテクニカン倉庫保管作品をめぐる資料調査報告

川口雅子

「パンテクニカン倉庫保管絵画等リスト。松方幸次郎氏資産」^[1]と題された文書の存在が2016年2月、英ロンドンのテート美術館付属アーカイヴで確認された。国立西洋美術館では目下、文書に収録された作品の同定調査を進めており、その成果を2017年から2018年にかけて刊行を目指す『松方コレクション西洋美術総目録（仮称）』に反映させる予定である。本稿は個々の作品研究に先立ってリスト全体を概観し、またロンドン残留の松方コレクションをめぐる周囲の動きを同時代文書や報道記事などを用いて辿ろうとする試みである。

実業家・松方幸次郎（慶応元年12月1日／1866年1月17日－1950年6月24日）が20世紀初頭にヨーロッパで収集した1万点を超えるといわれる膨大な美術品コレクションは、おもに（1）国立西洋美術館創設の礎となったフランス残留作品群、（2）イギリス残留作品群、（3）日本への輸送後に数次にわたる売立てを経て国内外に散逸した作品群、（4）パリの宝石商アンリ・ヴェヴェール旧蔵浮世絵コレクション（東京国立博物館蔵）などの系統が知られている。このうち（2）は保管先であるロンドンのパンテクニカン倉庫で1939年10月におきた火災により焼失し、これまでその内訳や数は明らかにされてこなかった（図1）。今回、同倉庫に保管された全作品を一覧にした同時代文書が発見されたことで、これまで謎に包まれていたイギリス残留分の解明が一步前進することとなった。松方がロンドンで美術品収集を始めたのは1916年と言われており、その100周年にあたって、コレクションの全容解明にせまる画期的発見となったといえよう。

1. 「パンテクニカン倉庫保管絵画等リスト」の概要

本文書は保管作品の作品番号、作家名、作品名、評価額を一覧にしたもので、タイプ打ち原稿A4判15枚からなる。全体で316件の通し番号が振られており、これまで山中商会ロンドン支店長・岡田友次（1880-1965年）の残した資料により伝えられていた約300という数を裏付けている^[2]。リスト末尾に掲げられた評価額総計は81,179ポンド14シリング6ペンスで、これも罹災後に十五銀行に支払われたと伝えられる補償金総額と一致する^[3]。文書の作



図1
現存するパンテクニカン倉庫の遺構
（2016年筆者撮影）

成日は記載がないが、後述の理由により作成年代の下限は1934年で、保険手続きの際に作成されたものと推測される。

リスト全体を眺めてみると、イギリスの作家が多数を占めており、その筆頭は松方と親交の深かったフランク・ブラングイン(1867-1956年)である^[4]。《ベルギー、1914年(大移動)》(リスト上の作品番号は247番、以下同様)、《産業の成果》(158番)などを含む絵画・素描・版画約70件がブラングインによるものである。ただしエッチング236点、リトグラフ20点、エッチング習作20点など複数作品を一括して1つの番号(283番)に割り当てている場合などもあるため、1点ずつを数え合わせるとその総数は数百点に上る。

1922年、松方の美術館建設計画を紹介する記事がニューヨークの美術雑誌『インターナショナル・ステューディオ』に掲載されており、そのなかで取り上げられたブラングインの油彩作品《キャラバン》(139番)、《アヴィニオンの城壁》(136番)、《静物、豚の頭部》(138番)などが本リストに収録されている^[5]。上述の《ベルギー、1914年》は、1924年にロンドンで開催されたブラングインの大回顧展に出品された横幅5メートルを超える大作と推測される^[6]。また、これまで関係者の証言により、松方の美術館構想にはこの画家のアトリエを移す計画のあったことが知られているが^[7]、本リストにはそれを裏付ける《ブラングイン室》(300番)が収録されている。

松方と交流のあった英ロイヤル・アカデミーの画家J・J・シャノン(1862-1923年)、チャールズ・リケッツ(1866-1931年)、彫刻家アルフレッド・ドゥルラー(1859-1944年)らの作品も本リストには数点含まれている。これらの作家の作品は、今まで知られていた旧松方コレクション中に確認することができず、湊典子氏によって「彼らの作品もまたその多くがパンテクニカンの火災で失われたことを示唆する」と推測されていたが、その推論の妥当性が今回のリストによって確認された^[8]。

リスト中、評価額の高い作品はフランスの画家ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ(1824-1898年)《漁》(78番)、エドゥアル・マネ(1832-1883年)《闘牛士》(51番)、フィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890年)《花瓶の花》(111番)などである。イギリスで活躍したジェームズ・マクニール・ホイッスラー(1834-1903年)《男性肖像》(54番)、ウィリアム・オーベン(1878-1931年)《西部の結婚式》(190番)なども比較的高額の評価がつけられている。

ほかに完成作ではないが、石膏模型《ヴィクトリア女王記念碑模型》(312番)も注目される。作者であるイギリスの彫刻家トマス・ブロック(1847-1922年)は今日では殆どその名を忘れられているが、英王室バッキンガム宮殿の正

図2
バッキンガム宮殿前の《ヴィクトリア女王記念碑》(2016年筆者撮影)



面に聳える巨大な記念碑と聞けば、ロンドンのランドマークの一つとして英国民ならずとも多くの人の知るところであろう(図2)。本リストに収録された石膏模型はその構想の一つと考えられる。トラファルガー広場と宮殿を結ぶ儀式用道路(「ザ・マル」)が整備されたのは20世紀初頭で、その南西端に据えられた同記念碑の除幕式は1911年、完成は1924年である。この王宮前的大がかりな開発計画は松方がロンドンに滞在し、作品を購入していた時期と重なっており、近隣の高級住宅クイーン・アング・マンションに仮寓を構えていた松方が工事の進捗を身近にとらえていたことが推測される。松方はブロックとも交流があり、そのアトリエを訪れるなど、親しく交わった^[9]。

このほか前出の『インターナショナル・ステューディオ』誌に、ロンドンやパリで活躍したアメリカ人画家ジョン・シンガー・サージエント(1856-1925年)による《コヴェントリー・パトモアの肖像》が掲載されているが、本リストにもこの英国詩人の肖像画が収録されている(61番)。近年刊行された同画家のカタログ・レゾネでは所在不明と記載されており^[10]、こうした個々の作品に関する研究の空白を埋め、国内外の作家研究の発展に貢献することが本リストに期待される。

リストに掲載されたロイヤル・アカデミーの画家ジョージ・クローゼン(1852-1944年)の作品のうち、油彩8点、水彩2点(7点)、版画1件(2点)は、この画家が残した松方への作品売却の記録と一致するものである。現在ロイヤル・アカデミー付属のアーカイヴが所蔵するクローゼンの手帳には1917年7月2日、松方が石橋和訓(1876-1928年)と共にクローゼンを訪問し、油彩《積み藁》を含む作品8点を購入したことが記されている^[11]。石橋は、英ロイヤル・アカデミーに学びロンドンで活躍していた日本人の画家である。以降松方は1918年5月21日までの間に油彩9点、水彩5点、版画2点を購入し、さらに再渡英後の1921年5月にも水彩2点を購入した。そのタイトルや購入点数がリストの記載内容と概ね一致する。ロンドンから日本への美術品輸送は1920年8月に休止されており、このとき発送されずにロンドンに残った作品があると推測されてきたが、1918年5月までのクローゼンからの一連の購入作品はこの推論を裏付けるものである^[12]。

2. 作品は全て焼失したのか

本リストには「松方コレクションは全てバンテクニカの火災によって焼失した(およそ3点の例外を除いて)」と題されたタイプ打ちの覚書1枚が添えられている。覚書はおそらく、火災後に作成され既存のリストに添付されたものであろう。仮にその記述のとおり「およそ3点」の焼け残った事実があったとしても、前述のように十五銀行に支払われた保険金とリストの評価額総計が一致することから、作品はいずれにせよ全て松方の手を離れたとみなすのが妥当と考える。

残存作品の行方が気になるが、ここでは当館の「ブラングイン展」(2010年)でも取り上げられた1点を検討候補の作品として紹介するにとどめたい。ブラングインは1913年のヘント国際博覧会で一室の装飾を全面的に任せられ、アーチ状の天井を持つ展示空間の入口上部に設置するため、巨大な壁画を制

作した。この作品は博覧会後ブラングインのアトリエに保管されていたが、後に松方の所有となっている。興味深いことに、共楽美術館別館の展示室デザインにもこの絵画の描き込まれているのを見出すことができる^[13]。一方、今回のリストにも《巻いた状態の巨大装飾画、ヘント国際博覧会》(261番)と題する作品が収録されており、タイトルから本作を指すものと推定される。しかし所蔵の経緯は不明ながら、同一作品と思われる油彩画がオーストラリアのミルドウラ・アーツ・センターに現存しているのである。これが覚書に言う「およそ3点の例外」の1点なのか、それとも火災前から別置されていて第三者にわたったのかは不明である。その真相究明については今後の追跡調査に委ねたい。

また同じ覚書に、「コレクションは全て数年前にパンテクニカンに移された」という伝聞の記述がある。これは、リスト本紙で彫刻作品(303-315番)がL.E.Pトランスポート・デポジトリという別の倉庫会社に保管されたことになっていることに対して補足したものであろう。経緯は不明だが、火災のあった1939年10月には全作品がパンテクニカン倉庫に保管されていたことをこの記述が示唆している。

3. 画商の買収提案

本リストはロンドンで19世紀から20世紀にかけて活躍した画商、アーサー・トゥース・アンド・サンズ画廊文書に含まれていた。トゥース画廊はこれまで松方コレクション研究の文脈で注目されたことはなかったが、この名が浮上したのは、当館に寄託されている旧松方コレクションのレオン・オーギュスタン・レルミット(1844-1925年)の大作《収穫する人々》の来歴調査の過程においてである^[14]。

トゥース画廊文書を所蔵するテート・アーカイヴの目録によれば、同館が60箱と資料架9連分にわたる膨大なトゥース画廊文書を入手したのは比較的最近の2010年4月のことである^[15]。トゥース画廊の閉廊は1976年のことから、記録文書は30年以上にわたって遺族のもとで保管されていたことになる。最終的に収蔵先となったテートはイギリス美術の研究拠点として作家や画商のアーカイヴ収集にも力を入れており、その意味では最善の保管場所に落ち着くことになったといえよう^[16]。同館アーキビストが筆者に口頭で語ったところによると、画商の遺族から文書を入手した後、2～3年の歳月をかけて整理作業を行い、公開の運びとなったという。

さてリストと共に保管されていた書簡によれば、トゥース画廊は1930年代、松方コレクションの管理者に売却話を持ち掛けていたことがわかる。そのとき日本側の窓口となったのは国際汽船株式会社ロンドン事務所である。同社は川崎造船所・鈴木商店などから船舶提供を受けて1919年に設立された海運会社で、松方が社長を務めていた。トゥース画廊は国際汽船に対し1934年5月5日付で「1933年9月25日付の手紙にご返信をいただいていないようです。その間、3美術館からウィルソン・スティーアとオーガスタス・ジョンの絵画作品について問い合わせがありました。これらの画家の作品は目下市場に出いていませんので、松方コレクションの作品を売却するまたとない機会

あることを重ねて強調したいと存じます」と当時人気のあったイギリス人作家の作品の売却を打診している。対する国際汽船は「財産処分といった案件について私どもは交渉する立場にございません」と返信し、あくまで連絡窓口でしかないという姿勢で提案をかわしている。

1934年5月14日、トゥース画廊は「私どもは通し番号の付された絵画作品リストを所持しています。それには評価額が記されており、そのことにより作品には保険がかけられていると理解しています。きっと御社も同様の写しをお持ちのことと拝察します」とリスト所持の事実を明かしている。この記述により、今回みつかったリストは、前述のとおりこれ以前に作成された文書であることがわかる。トゥース画廊はリストを所持していたことで、具体的な買取提案が可能だったのだろう。

その一方、トゥース画廊は絵画の現物を実見したことはないとも告白しており、手元の文書から金額を査定したようである。リスト上の評価額と同等の処分を見込めるのはスティア(1860-1942年)、ジョン(1878-1961年)、オノレ・ド・ミエ(1808-1879年)、ウジェーヌ・ブーダン(1824-1898年)、ファン・ゴッホであるのに対し、大半を占めるブラングインは目下市場では価値を下げていると分析し、売り時ではないと助言している。

この提案が日本側にどう伝わったかは不明だが、交渉は全く進展しなかった。1年半近くを経た1935年10月26日、トゥース画廊は交渉再開を求めている。同時に作品実見の機会を要望し、また売却しないならば、何年も人目に触れていない絵画を美術愛好家に披露する機会を設けてはどうかと代替案を提示した。そこにはプライベート・セールの可能性を探る美術商の商魂も見え隠れする。

交渉の窓口となった国際汽船側は日本からの連絡を待つとの一点張りで、交渉は何度も途絶え、結局殆ど進まなかった。こうした一連の通信文書に続いて収められていたのが本リストである。前述したように、リストには「松方コレクションは全てパンテクニカンの火災によって焼失した」と記した覚書が添えられており、交渉不調のまま作品を焼失させてしまった画商の喪失感が伝わってくるようである。

4. 作品の輸入再開を求めて

松方の収集品がロンドンやパリに残っていたのは、日本への作品輸入が中断されたからである。その理由は保管場所の不足や奢侈品税にあるが、川崎造船所秘書課が当時語ったところによれば、この2つの問題は個別に存在していたわけではないようだ。「美術品の大部分は既に内地に到着しているのですが松方さんの考えはこんなに沢山の美術品を一時に持って帰っても入れる場所がないので先ずそれを入れる美術館を建てることとなり既に東京麻布の仙台坂に約二万五千坪の土地を買い其所に共楽館と云う小美術館を建てる計画」を立てたが関東大震災のため延期となり、「そんな訳で残りの品は先ず美術館が出来てからと云う考えで之に関して別に急がなかったのです、所が輸入税が十倍にもなったし美術館も未だ建てる運びに行かないので急ぐ必要もないから今のところ其の儘外国で保管して居るに過ぎな

柏亭(1882-1958年)が戦後になって昭和初期の松方コレクション売立を回顧し、売立という措置に最初に踏み切ったのは藤本ビルブローカー銀行であったことを述べている^[24]。当時の新聞にも、例えば「展覧後の処分についてはただ藤本ビルブローカー銀行の手で処分されるというだけで漠然としていたが最近になっていよいよ画商青樹社画堂、室内社、中央美術会外一軒の手を経て名画二百点の内約半数が売却されることになった」^[25]とする記事があり、同展の目的が藤本ビルブローカー銀行による担保処分であることは周知のことであった。またこの記事から明らかなように、美術家の団体である国民美術協会は売買取引自体には手を染めず、作品の売買は画商の青樹社、室内社などの仲介により行われた。これらの画商はその後も松方コレクション売立に関わっていくことになる。

当時、十五銀行整理のため松方の父・松方正義(1835-1924年)や兄・巖(1862-1942年)、あるいは川崎造船所整理のため川崎男爵家も私財を提供したように、会社整理における幹部・重役の私財提供や美術コレクション売立は珍しいことではなかった^[26]。しかしヨーロッパで買い集められた「泰西名画」の松方コレクションの場合は世間の反応も異なり、散逸を惜しむ声が高かった。差し押さえが報じられた直後から、コレクション分割を危惧する声があがっている。その際、当時はまだ人々の記憶に新しかったのか、1919年に行われた《佐竹本三十六歌仙絵巻》の分割処分なども引き合いに出されている^[27]。

さらに第1回売立を目にした大物政治家の床次竹二郎(1867-1935年)は正木直彦(1862-1940年)東京美術学校長と連携し、国家による保護も念頭にコレクション散逸回避に向けて世論を喚起しようとした。正木もこれを受けて、パリ滞在中に松方の作品購入と間近に接し、コレクションの内容に通じていた洋画家の和田英作(1874-1959年)と対応を協議したようである^[28]。

しかしこうした努力も悪化の一途をたどる経済情勢下には実ることはなく、1930年に入り、ついに十五銀行の担保分も本格的に処分される状況になっていく。売立に先立ち、「先に此の担保品を国民美術協会の手を以て処分せんとしたが当時床次竹次郎氏[ママ]が斯かる名品のコレクションを散逸させるのは国家的損失であるとみなし正木美術学校長、和田英作三氏協議の結果十五銀行重役とも了解を得て当分、分売しないことになり松方氏も何とかしてそれを国家に寄附するか大富豪の手によって散逸を防ごうと苦心したが金解禁後の不景気は遂に以上の人々の苦心も水泡に帰し愈々近く処分されることになった」と報じられ、同じ記事のなかで国民美術協会の石井も「十五銀行に担保となっているものは幾度か処分されそうになったのをようやく食い止めて来ましたが今度はどうも難しいようです」と語っている^[29]。記事によれば、このとき国民美術協会は神戸に保管されていた作品群全体の評価を十五銀行から依頼されていた。

国内で1点ずつ切り売りされることになった経緯には、分割してでもあくまで国内で処分し、海外流出を防ぐという考えもあったようだ。1930年5月の媒体に「一時は米国で売却せんとする考えもあったが、折角のコレクションを米国人に渡すのは遺憾であるとの反対説の為、国民美術協会が主宰となり来る17日から6月6日迄府美術館で展覧を催すことになった」とする記事が

いのです」とある新聞が伝えている^[17]。つまり保管場所が不足し、美術館建設計画も進まないため輸入を控えていたところ、関税が引き上げられてしまったというのが実情だろう。

美術品輸入を阻んだ奢侈品税は松方個人のみならず、当時美術関係者の間でも問題視されていた。こうしたなか、関税改正を求める抗議運動として実施されたのが1926年2月に上野・竹之台で催された光風会第13回展である。光風会は特別室を設けて松方コレクション12点を展示し、奢侈品税是正の必要性を世論に訴えた^[18]。このとき「松方氏は光風会幹部に対し『君達の為にあれだけのものを買ったのに等しいのだがどうして当面の専門画壇の士は冷淡なんだろう』」と反応したとする記事がある^[19]。松方が語ったという言葉の真偽はともかくとして、その美術収集が個人の趣味ではなく、国への貢献を前提とした崇高なものであったことが広く流布していたことがうかがわれる。輸入の障壁となった関税問題を解決し、英仏からの作品の「招来」を再開することは美術関係者の強い望みであった。

5. 藤本ビルブローカー銀行による売却開始とコレクション散逸

松方コレクションが英仏に留め置かれているうちに、昭和恐慌のあおりを受けた川崎造船所整理のため、社長の個人資産である美術品が差し押さえられ、数次にわたる売立で散逸したのは周知のとおりである。日本で散逸したこのいわゆる旧松方コレクションは、松方家に保管された数点や人づてに売却された一部の例外を除いて、従来すべて十五銀行によって押収されたものであるかのように語られてきた。しかしあらためて経緯を辿てみると、藤本ビルブローカー銀行（大和証券グループの前身）、日本興業銀行（みずほ銀行に合併）、安田銀行（みずほ銀行の前身）など、そのほかに少なくとも大手銀行3行が関与していたことは明らかである^[20]。

昭和初期において、十五銀行・川崎造船所の危機は連日のように報道されているが、そのなかで松方コレクションに動きがあるのは政府による川崎造船所救済の打ち切りが報じられた直後である。1927年7月6日、朝日新聞は「価格およそ五百万円といわれてそのうち半数は既に日本に到着し一部は東京に送り大部分は造船所の地下室と倉庫に保管してあったがこの程地下室の分は藤本銀行に倉庫の分は十五銀行に差押えられ銀行はこれを持ち帰った 尚残り半数は奢し関税が設けられ従価十割の輸入税がかかることになったので今尚イギリスに残してある」と報じた（傍点は筆者）^[21]。松方の私財提供について、「泰西名画彫刻類を十五銀行、藤本ビルブローカー銀行その他へ債権のかたに差だし」とする報道もある^[22]。

渦中の松方は「先年欧洲で買集めた美術品が銀行に押えられているが、英国に残してあるものも全部この場合売払い借金を返すつもりになっている」と苦しい胸の内を明かしている^[23]。会社の危機を前にイギリス残留コレクションへの執着も捨てざるを得なかったのだろう。

押収された作品は翌1928年3月、開館して間もない東京府美術館において「松方氏蒐集欧洲美術展覧会」という催しで展示され、売り立てられた。主催したのは国民美術協会である。当時同協会の理事を務めていた石井

ある^[30]。また美術品を押収した側も、一括購入をする買い手が現れることを望んでいたようだ。藤本ビルブローカー銀行が後述のように2回目の売立を大阪で実施した際、「富豪が一手に買いとって、美術館でも建ててくれれば、というのが理想でしたが、今となっては一つ一つ切り売りするより外なくなりました」と語っている^[31]。美術品の差押えから分割処分に至るまでには、散逸や国外流出を防ごうとする美術団体、美術関係者、政治家等の願いや、一括処分を望む美術商の思いが交錯していた^[32]。

この間、第2回売立は初回ほど大きく話題にはならなかったようだが、1929年4月に三田松方邸に置かれていた十五銀行保管の作品と日本興業銀行保管作品の処分として行われている^[33]。この際に売り立てられたタペストリーはその後2000年代に入り日本興業銀行より当館に寄贈された。十五銀行保管分の売立はこの後1930年の第3回売立、翌1931年の第4回売立へと続いていく。1934年2月の第5回売立は債権者名は不明だが、少なくとも「十五銀行、藤本銀行に担保となった蒐集品を除いた未公開のものばかり」で構成されたことが報じられている^[34]。同年5月に初めて大阪で催された第6回売立は藤本ビルブローカー銀行保管分によるもので、第1回売立の残りを阪急百貨店で売却しようとしたものである^[35]。その後の売立を経てなお未処分のまま残された美術品や家具類はのちに大和証券に受け継がれ、それも最終的には散逸していった。そのなかに2001年、同社より共立女子大学に寄贈された旧松方コレクションのフランス・イギリス家具類がある^[36]。このほか安田銀行保管作品の売立は、石井柏亭によれば青樹社により日本美術協会で開催されたとあり、1934年11月の第7回売立がそれにあたる^[37]。

6. ロンドン残留作品をめぐる日本側の報道

日本に到着した作品が散逸の憂き目にあっていくなか、ロンドンやパリに残された作品はどのようにみられていたのであろうか。

海外残留コレクションが松方の個人資産という枠を超えて、美術界全体で保護すべき共有財とみなされるようになっていたことを示す新聞報道がある。前出の正木東京美術学校長はある新聞で、床次が日本で見たものより、パリやロンドンに残されているものは「数倍貴重なもの」とし、「それが僅の金のために分散してしまうことになると、松方氏の面目のみならず国家の面目にも関すると思う、どうかこれを機として輿論を喚起し、国家としてこれを擁護する途を講じてほしいと思う」と語っている^[38]。

また大正から昭和にかけて日本で活動していたフランス人の画商エルマン・デルスニス(1882-1941年)による処分という話が話題に上ったこともある。ある新聞が「松方氏の蒐集品中、巴里及び倫敦に残してあるものが、先般公開したものより数等優れたものであることは既報の通りだが、目下来朝中のデルスニス氏も大いに食指を動かし、若松方氏が彼の品々を日本に持帰らず処分するならば、自分としては多少自信があり、巴里に於いて処分するよりか、より多く有利なる方法を講じて見よう、と松方氏の側に申し出でた事実があり」と報じている^[39]。デルスニスはまさにこの頃、美術評論家の黒田鵬心(1885-1968年)と共同で設立した日仏芸術社(1924年設立、1931年解散)におい

て「仏蘭西現代美術展覧会」を次々に開催し、フランス美術の紹介と作品の販売を手がけていた。

十五銀行の担保処分が本格化した1930年、パリ残留分について「到底内地へ招来することが出来ないのではこれはパリでオークションにかけられるのも遠くはあるまいと伝えられている」とする記事が出されている^[40]。その一方、「パリとロンドンにあるものには今まで接したことのない名作が沢山あるがそれを取り寄せて東京で処分するという話も耳にしている」というある画家の談話を紹介する記事も登場する^[41]。根拠のない不確実な噂話のようにみえなくもないが、いずれにせよこの頃になると海外に残された松方コレクションがまとまって保護されるという希望は絶たれていたとみることはできるだろう。

1939年になると、再びイギリス残留作品の話題が新聞紙上ににぎわすことになる。十五銀行の担保整理の必要と、戦時経済下の外貨獲得をめぐる大蔵省の思惑が重なり、ロンドン倉庫保管分も一括してロンドンにて売却の見通しというニュースが1939年8月、数紙で報道されたのだ^[42]。それによれば、松方家は「最近に至って同コレクションを受出さぬことに決定」し、「現在東京十五銀行に保管中のものだけでも価格270万円に上り、その外ロンドンの某倉庫にも価格数百万円のものが残っていると云われている、これ等は一括してロンドン方面で売却する予定で十五銀行では某国の有力な美術商との間に目下売買交渉を進めている」という^[43]。上述のように、この少し前にはロンドンでトゥース画廊が熱心に関心を買収提案を持ちかけていたはずであるが、それとの関連性は不明である。同じ記事中で十五銀行は「松方コレクションを国外で処分することは事実ですが売買交渉上の支障もあるもので詳細は申上げられません」と語り、少なくとも国外で処分する計画のあることを事実として認めていた。いずれにせよ日英両国で売却処分に向かう動きがあったことは確かといえる。

しかしこうした日本とイギリスとでそれぞれ練られていた売却の構想も結局は実を結ぶことはなく、この報道から2か月後の1939年10月、作品はパンテクニカン倉庫の火災により灰燼に帰すこととなったのである。

まとめにかえて

本稿では今回新たに発見されたパンテクニカン倉庫の保管作品リストについて概観し、約300件という作品件数や、松方と交流のあったイギリス人画家の作品の存在などは、これまでの仮説を裏づけるものであることを確認した。トゥース画廊がリストを入手した経緯は不明だが、松方コレクションは1930年代当時、人目に触れられず忘却されていたのではなく、内情を知る画商の目には魅力的なコレクションとして映っていたといえる。

また従来あまり注目されてこなかった散逸の経緯について、これまで専ら言及されてきた十五銀行以外にも、藤本ビルブローカー銀行、日本興業銀行、安田銀行など各行の関与があることをあらためて確認した。売立の実情を明らかにすることは日本で散逸したいわゆる旧松方コレクションの各作品の来歴に関わることであり、また不明作品を追跡調査する際の指針となることも期待できる。冒頭に記したとおり、当館では引き続き松方コレクションの西洋

美術作品全般に関する調査を行い、その集大成として西洋美術コレクションの復元目録を刊行する予定である。本稿はその意味ではささやかな中間報告にすぎないが、今後の松方コレクション作品研究に幾ばくかでも貢献することがあれば幸甚である。

[1] 'List of Pictures etc. Stored at the Pantechnicon. The Property of K. Matsukata esq.' Correspondence concerning the Matsukata Collection. Arthur Tooth and Sons, London. Tate Archives, TGA 20106/1/11/51. パンテクニカン倉庫における作品焼失について初めて詳細に調査したのは湊典子氏である。湊典子「松方幸次郎とその美術館構想について(上)」『Museum: 東京国立博物館美術誌』395号、1984年、pp.31-40。同氏からは今回の調査に際し多くのことをご教示いただいた。記して感謝したい。なお本稿執筆にあたり科学研究費「海外における松方コレクション関連資料の収集と公開」(研究代表者・大屋美那、課題番号24520127、2012-13年度)および「在外松方コレクション資料の学術調査と美術品来歴研究」(研究代表者・馬淵明子、課題番号16H05668、2016年度より継続中)の支援を受けている。

[2] 湊典子「松方コレクションのイギリス絵画」『松方コレクション展』神戸:「松方コレクション展」実行委員会、1989年、pp.124-132、とくにp.124。

[3] 越智裕二郎氏は「岡田友次の手帳」に基づいて保険金「81,719ポンド14シリング6ペンス」が十五銀行に支払われたとしている。十と百の位の数値が入れ替わっているが、どこかで写し間違えが生じたと推測される。越智裕二郎「松方コレクションについて」『松方コレクション展』神戸:「松方コレクション展」実行委員会、1989年、pp.110-118、とくにp.116。

[4] 松方とブラングインとの親交およびロンドンにおける松方コレクション形成、松方の個人美術館である「共楽美術館」の構想については、当館の大屋美那主任研究員(当時)が生前に企画した展覧会で詳らかにしている。『フランク・ブラングイン展』東京:国立西洋美術館、2010年。

[5] Mrs. Gordon-Stables. "Tokio's Occidental Museum", *International Studio*, Vol. LXXV, no.304, September 1922, pp.455-467.

[6] 大屋美那「フランク・ブラングインと松方幸次郎」『フランク・ブラングイン展』東京:国立西洋美術館、2010年、pp.68-71、とくにp.70。回顧展に際して、ときの英国首相ジェイムズ・ラムジー・マクドナルドが開会の辞を述べたという。

[7] 「ブラングイン自身の意匠に成る家具、机、椅子、壁掛、卓子等も到着するので美術館建設の晩には、ブラングイン室といふ様な部屋も設けられるさうである」。藤島武二「松方氏蒐集作品に就て」『中央美術』vol.5, no.8, 大正8年8月号、1919年、p.60。

[8] 湊典子「松方コレクションのイギリス絵画」(注2参照)pp.131-132。

[9] Frederick Brock, *Thomas Brock: Forgotten Sculptor of the Victoria Memorial*, [Place of publication not identified]: Ian Thompson, [2012], p.141.

[10] Richard Ormond, Elaine Kilmurray. *John Singer Sargent: complete paintings*, New Haven: Yale University Press, 2002, v.2, no.303.

[11] 'Notebooks of George Clausen 1885-1931'. Sir George Clausen, papers 1885-1940. Royal Academy of Arts Archive. CL/5.

[12] 湊典子「コレクター松方幸次郎とその蒐品」『松方コレクション展』神戸:松方コレクション展実行委員会、2016年、pp.20-35、とくにpp.24-25。

[13] 大屋美那「ヴェネツィア、ヘント、パリ:共楽美術館設計に向かって」『フランク・ブラングイン展』東京:国立西洋美術館、2010年、pp.72-77、とくにpp.74-75;湊典子「松方コレクションと工芸」『織り出された絵画』東京:国立西洋美術館、2003年、pp.24-28、とくにp.25。《共楽美術館別館のための展示室デザイン》は「ブラングイン展」(2010年)に出品されている(カタログ53番)。なお、同展にも出品された松方旧蔵の《ベルギーの嘆きの聖母》、《白鳥》(いずれもウイリアム・モリス・ギャラリー所蔵)の該当作品は現時点ではリストに見当たらない。

[14] 当館の陳岡めぐみ主任研究員がカタログ・レゾネの本作品の項目に「トゥース、1919年」という記載を見出し、この画商が松方コレクション研究における調査対象として認識されるきっかけとなった。Monique Le Pelley Fonteny. *Léon Augustin Lhermitte, 1844-1925: catalogue raisonné*. Paris: Cercle d'Art, 1991, no.173.

[15] <http://archive.tate.org.uk/Dserve/dserve.exe?dsqServer=tdc-calm&dsqIni=Dserve.ini&dsqApp=Archive&dsqCmd=Show.tcl&dsqSearch=RefNo==%27TGA%2020106%27&dsqDb=Catalog> (2017年1月4日にアクセス、以下同様。)

[16] ただし同画廊の文書がすべてテートにあるわけではなく、ほかにロサンゼルス・ゲティ研究所に台帳の保管されていることが公に知られている。このように資料が分散して保管されることはめずらしいことではない。

[17] 「泰西名作品の残りは其儘欧州に保管:関税引上げから引取らぬ松方家」『大阪朝日新聞』1925(大正14)年1月24日。なお本稿において、新聞記事の本文を引用する際は適宜現代仮名遣いに変更した。本研究に際し参照した新聞記事の収集整理は、小熊佐智子、大谷久美の両氏の尽力によるところが大きい。

[18] 「光風会の連中が近く運動に着手:関税で行きなやむ松方氏の美術品輸入問題で」『読売新聞』1926年2月15日:「七百五十万円美術品宙ぶら:見当違いの関税改正を撤廃したいと美術家の運動」『都新聞』1926年2月15日:「三千万円の欧州名画が迷子:松方氏が計画の大美術館も奢侈品税の悪法の為行悩み 或は議会に一問題か」『東京毎夕新聞』1926年2月15日[?]。いずれも東京藝術大学所蔵の「諸新聞切抜」をマイクロ版にまとめた東京美術学校編『近代美術関係新聞記事資料集成』東京:ゆまに書房、1991、vo.44を参照した(以下、「近代美術関係新聞記事資料集成」)。

[19]「美術家連が関税改正の運動：松方氏の集めた七百五十万円の美術品も立腐れと光風会が旗頭で」『東京朝日新聞』1926年2月17日。

[20] この問題に注意を向けてくださったのは大和証券株式会社総務部の前田拓也氏、中山優子氏である。また山田充郎氏、大塚融氏からも大変貴重なお話をうかがった。記して感謝したい。このほか石井柏亭「松方蒐集の絵画に就て」『みづゑ』500号、1947年、p.48。

[21]「川崎の飛んだまきぞへ：松方氏が欧州で買集めた美術品差押へらる」『朝日新聞』1927年7月6日夕刊1面。

[22]「今は最後の愛犬ともお別れ：兄巖公の心境に打れて松方幸次郎氏が涙の決心」『朝日新聞』1927年12月7日朝刊7面。

[23]「川崎の建艦引つぎ艦政本部の首脳川崎へ乗込む」神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫・大阪朝日新聞 1927年7月21日(昭和2) 会社(9-123)を参照。http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=10032909&TYPE=IMAGE_FILE&POS=1&LANG=JA

[24] 石井柏亭「松方蒐集の絵画に就て」(注20参照)。国民美術協会編『国民美術協会略史』国民美術協会、1930年、pp.10-11。

[25]「松方氏の名画 散逸の運命：売られゆく約百点」『東京日日新聞』[?]1928年3月、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.48。

[26] この時期の美術品の売立については下記の研究がある。高松良幸「売立目録所収美術作品のデータベース化とその近代日本における美術需要史研究への応用」『平成19-21年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書』2010年6月。

[27]「松方氏蒐集の美術品はドウなる：最急の処分法に就て」『大阪時事新報』[?]1927年8月2日[?]、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.47。

[28]「松方美術館建設に床次顧問乗り出す：松方幸次郎氏の『泰西名画展』に感激しその散逸を憂ひ」『都新聞』1928年3月31日；「松方美術館建設の寄付金を募る：床次氏の運動に賛し石井氏等が輿論喚起」『都新聞』1928年4月6日、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.48。なお床次は松方と同郷の鹿児島出身である。1935年に床次が没した後、松方はその地盤を継いで鹿児島から出馬した。

[29]「惜しや松方コレクション 遂に分売の悲運に逢着：担保にとった十五銀行がこの不景気に持堪えられず」『東京毎夕新聞』1930年2月8日。

[30]「筆頭は五萬圓：セザンヌの名作 松方氏のコレクション百三十点の売立て」『時事新報』[?]1930年5月、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.52。売立目録の序文にも日本に留めておきたいとする同様の考えが記されている。『第3回松方氏蒐集絵画展覧会目録』東京：国民美術協会、1930年。

[31]「倉を出る世界の傑作：松方幸次郎氏蒐集の泰西名画 十九日から阪急で展観売立」『大阪毎日新聞』1934年5月8日、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.60。

[32] なお十五銀行が差し押えた浮世絵コレクションは十五銀行頭取・入間野武雄らの尽力により第2次大戦中の1944年、一括して宮内省に献上されるという途をたどった。その後、東京国立博物館に収蔵されて今日に至る。

[33]「松方コレクションの未発表[?]もの展観」『都新聞』1929年3月、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.50；石井柏亭「松方蒐集の絵画に就て」(注20参照)。

[34]「上野と丸の内で相競ふ美術の華：福島、松方両コレクション展」[掲載紙不明]1934年1月31日、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.60。ただし、なかにはジョヴァンニ・セガンティーニ《羊の剪毛》(国立西洋美術館P.2007-0002)のように第1回売立に出品されたものもあり、すべてが未公開とはいき切れないようだ。

[35]「倉を出る世界の傑作」(注31参照)。

[36] 湊典子「松方コレクションと工芸」(注13参照)。

[37] 石井柏亭「松方蒐集の絵画に就て」(注20参照)。売立を含む松方コレクション関連の展覧会については国立西洋美術館編 大屋美那、川口作成『松方コレクションに関する展覧会：1922-1960年』国立西洋美術館発行、2013年を参照のこと(https://www.nmwa.go.jp/jp/about/pdf/matsukata_collection_print.pdf)。

[38]「巴里、倫敦には数倍の貴重品：奢侈税で持って来られないもの国家で保護したい」[掲載紙不明]1928年3月、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.48。

[39]「松方美術館建設の寄付金を募る」(注28参照)。

[40]「遂に切売りされる松方コレクション」『東京毎夕新聞』1930年4月15日、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.52。

[41]「各国の画商が東京に集り今秋、世界的の大売り立て：いよいよ日本に取寄せられた上散逸する松方コレクション」[掲載紙不明]1930年5月、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.52。

[42]「松方コレクション外貨獲得に一役：銀行の倉庫に埋もれる近代欧州の名画 いよいよ海外で売立」『中外商業新報』1939年8月20日；「惜しまれる松方コレクション 貴重な外貨獲得へ近く海外へ搬出残る名画秘宝なほ数百万円 英商へ売却交渉」『大阪時事新報』1939年8月20日、『近代美術関係新聞記事資料集成』vol.70。このほか、「名画も一役ご奉公：松方コレクション倫敦で売立て」『読売新聞』1939年8月20日朝刊7面。

[43]「松方コレクション外貨獲得に一役」(注42参照)。

In February 2016, I was made aware of the existence of a document titled, “List of Pictures etc. Stored at the Pantechmicon. The Property of K. Matsukata esq.” in the Tate Archive, London. Work is progressing on the identification of all of the art works collected by the Japanese businessman Kôjirô Matsukata (first day of the 12th month of Keiô 1 in the Japanese calendar/January 17, 1866 – June 24, 1950) in Europe between the Wars, and the results of the project will be published as a general catalogue of the Matsukata Collection (in two volumes scheduled for release in 2017 and 2018). Prior to that publication, this article presents an overview of the object list, and investigates materials related to the movements of the Matsukata Collection items that were stored in London.

The massive art collection that Matsukata assembled in early 20th century Europe consists of:

- i) the group of works that were previously in France that became the basis for the NMWA;
- ii) the group of works stored in England;
- iii) the group of works that had been sent to Japan and then were dispersed by a succession of auctions;
- iv) and works such as those formerly owned by the Parisian jeweler Henri Vever (*ukiyo-e* works from the Matsukata Collection now in the Tokyo National Museum).

Of these works, group ii) was stored in the Pantechmicon warehouse in London, which burned down in October 1939 with all contents destroyed by the fire. The exact contents of that group and its numbers have been unknown. The 2016 discovery of a document that provides an overview of the group, listing the artist, title and evaluation of each work in the group, takes us one step forward in understanding the London group. This discovery – made a century after Matsukata was said to have begun collecting artworks in London in 1916 – is époque-making for our understanding of the entirety of his collection.

The newly discovered list consists of 15 typed A4 sized pages. Overall, 316 items are listed in numerical order. That figure confirms the number included in materials left by Tomoji Okada of Yamanaka & Co.’s London branch. The overwhelming majority of the listed works were by British artists, headed by those of Frank Brangwyn, a close friend of Matsukata. The list includes such major Brangwyn works as *Belgium, 1914 (Exodus)*, which was displayed in the 1924 Brangwyn retrospective. The *Brangwyn Room* decor included in the list underscores what had previously only been known from the comments made by related individuals, namely the plans to move the *Brangwyn Room* to Tokyo. There is also a scattering of works by such British painters as James Jebusa Shannon and Charles Ricketts and sculptor Alfred Drury, who were all acquainted with Matsukata. Works by these artists have not been previously found in the Matsukata Collection. We can surmise that *Model of the Victoria Memorial*, by another sculptor, Thomas Brock, is based on the memorial of the same name that graces the front of Buckingham Palace. Thus this group can be said to be a condensed essence of early 20th century British art.

This list was included in the Arthur Tooth and Sons Gallery papers.

According to correspondence preserved with the list, in the 1930s this gallery wanted to purchase Matsukata Collection works from Kokusai Kisen Kabushiki Kaisha, Ltd for further sale. There was particularly passionate interest in buying the Matsukata Collection works by Philip Wilson Steer and Augustus Edwin John, two British artists then extremely popular. These documents indicate that the Matsukata Collection was not some unknown entity unseen by human eyes, but rather a collection that fascinated the art dealers who knew its contents.

Conversely, while art groups in Japan had started a movement asking for changes in the luxury items tax aimed at the importing of artworks, the overseas storage of Matsukata's collection did not change. Then in a very short time Matsukata's collection in Japan was impounded as the personal assets of the president of his company, Kawasaki Dockyard Co., Ltd., then being reorganized after bankruptcy. The works were auctioned and thus scattered. Embroiled in that process, Matsukata announced in an Osaka newspaper, "While the works I purchased in previous years in Europe have been seized by the bank, those works left in England will also be sold in this instance in order to repay outstanding loans." Faced with his company's difficulties, it would seem that he had to shed his attachment to those works.

While previously attention has focused on the Jugo Bank as creditor, in fact there were also others. The first Matsukata Collection auction held in 1928 was of works held as security by the Fujimoto Bill Broker Bank. Those works not sold were inherited by that bank's successor, the Daiwa Securities Group, and in the end those works were also scattered. The Ex-Matsukata Collection furniture and other materials donated by Daiwa to Kyoritsu Women's University, Tokyo, are some of those remaining items.

In 1939, the works remaining in England once again became the topic of discussion. This furor was set off when an Osaka newspaper reported that the Japanese Ministry of Finance ordered Jugo Bank to sell the remaining Matsukata Collection works, including those in the London storehouse, in London as part of its efforts to gain foreign credits in wartime. While it is unclear how the Tooth Gallery was involved, it is certain that movements were being made both in Japan and England to sell off the works. However, these plans were never realized, given the content of a memo that accompanied the newly discovered list, "The whole of the Matsukata collection was burnt in the Pantechnicon fire, with the exception of about three pictures."